賣レ柑者ヲノ言

劉覆瓿（フクホウ）

講題　蜜柑賣の言つた物語を記した文と云ふこと、

大旨　腐つた内容を飾つて立派に見するは、蜜柑賣のみに限らざることを言ふ、

目的　當世の士を諷するにあり、

大段落　凡そ三大段となす、第一大段は篇首より「甚矣哉爲欺也」に至る、賣柑者が腐敗せる柑を賣つて人を瞞著したる事實を述ぶ、第二大段は「賣者笑曰」より「以察吾柑」に至る、賣柑者の議論にして、本篇の骨子たる處、第三大段は「予默然」より篇尾に至る、此れ作者が賣柑者の言に就いて下したる論評なり、

杭ニ有リニ賣ルレ菓ヲ者一、善ク藏スレ柑ヲ、渉ヘテニ寒暑ヲ一不レ潰エ、出ダセバレ之ヲ爗エフ然玉質ニシテ而金色、置ケバニ于市ニ一、賈アタヒ十倍ス、人爭ウテ鬻ヒサグレ之ヲ、予貿カウテ得タリニ其一ヲ一、剖サケバレ之ヲ如シ三有ツテレ烟撲ウツガニ口鼻ヲ一、視レバニ其中ヲ一則乾如シニ敗絮ジヨノ一』

第一大段の第一小段なり、買ひ求めたる所の柑が腐敗物なりしことを言ふ、

訓義　〔杭〕地名、浙江の杭州、〔渉〕歴ること、〔爗然〕つやがあり、光り輝いて居る形容、〔質〕肌合、地合、〔市〕市場、〔賈〕價に同じ、〔鬻〕賣るなり、〔貿〕金にかへる、卽ち買ふこと、〔剖〕さく、わる、〔敗絮〕古綿（フルワタ）、

講述　杭州に菓（クダモノ）を商ふ者があつたが、此の男は上手に蜜柑をかこつて置き、熱（アツ）さ寒さを經ても一向惡（ワル）くならぬ、出して見ると艶艶（ツヤ）して、地合は玉のやうであり、色合は金（コガネ）のやうであり、市場へ持つていつて之を置くと、價が普通の品より十倍にもなる處で、人人は我れ先きにと仕込んでは賣る、自分は試みに一つ買つて見た處、剖（サ）いて見て驚いたのは、烟り見たやうな氣がプンと口や鼻を衝いたのである、是はと思つて善く其中を視る

と云ふと大變、ひからびて古綿を詰めたやうであつた、

予怪而問之曰若所市於人者、將以實籩豆奉祭祀、供賓客乎、將衒外以惑愚瞽也、甚矣哉爲欺也、『第一大段の第二小段なり、賣柑者の人を欺くことを言ふ、

訓義　〔若〕汝なり、〔市〕賣るなり、〔籩豆〕籩は竹製の器、菜食などを盛るもの、豆は木製の器、肉を盛るもの、〔衒〕てらふ、

講述　自分は蜜柑の腐つて居るのを觀て、怪しからんと思つて其者に尋ねて見た、一體貴樣が人に菓物を賣るのは、御客が籩であるの豆であるのとの云ふ器に入れて、神の御祭に御供物として棒げたり、來客に差出すやうにする積りであるのか、それとも外面を善いやうに見せて、馬鹿や瞽を胡麻化さうとするのか、どうも酷いではないか、こんなイカサマをするとは、

文法　欺の字は一篇の字眼、

賣者笑曰、吾業是有年矣、吾業賴是以食吾軀、吾售之人取之未嘗有言、而獨不足子所乎、世之爲欺者不寡矣、而獨我也乎、吾子未之思也、『第二大段の第一小段なり、世の中に僞りをなすものゝ少からざるを言ふ、

訓義　〔吾業〕業は已になり、〔食〕養ふと訓す、

講述　自分は蜜柑賣を詰責した處、彼奴笑つて云ふやう、私は何年となく此の商賣をして、今始まつたわけではない、自分は此の御蔭で吾が身を養ひ、毎日暮しを立てゝ來た次第であるから、自分に取つては非常に大切な商賣向きなので、それを無理に人樣に押賣りをするのではなく、此方が賣れば御客樣が勝手に御買取りになり、是れ迄一度も品が宜しくないなどと云ふ御小言を承つた事がありません、それに旦那計りは御不足に思召しなさるが、手前にはどうも受取れませぬ、旦那は私をだますと仰しやるが、世間で人をだまかす事

をする者は決して少くない、何で私一人でありませう、あなたは善く御考へなさらぬから、其んな事を仰しやるのです、

文法　先づ天下を擧げて人を欺くことを言ひ、以下、官に居る者の人を欺くことを歴擧して之を實にす、

今夫佩レ虎符一坐二皐比一者、洸洸乎干城之具也、果能授二孫吳之略一耶、峩二大冠一拖二長紳一者、昂昂乎、廟堂之器也、果能建二伊皐之業一耶、『第二大段の第二小段なり、大臣大將の外觀の立派なることを言ふ、

訓義　〔虎符〕大將の持つ割符にして、虎の形が彫刻せられたるもの、〔皐比〕虎の皮、〔干城〕詩經の周南兎苴篇に、赳赳武夫、公侯干城とあるに本づく、卽ち王公の楯ともなり城ともなつて防衞する人、〔具〕器と云ふに同じ、〔孫吳〕孫武と吳起、共に戰國の兵法家にして名將を兼ぬ、〔略〕謀略、〔峩〕聳ゆる形なり、頭に戴くこと、〔長紳〕大帶、〔昂昂〕氣高き貌、〔廟堂之器〕大臣宰相の才ある者を言ふ、〔伊皐〕伊尹と皐陶、伊尹は殷の湯王を佐けて王業を成さしめたるもの、皐陶は堯舜の時の賢臣、

講述　今あの虎の畫のかいてある、割符を腰に附け、虎の皮の敷物に坐つて居る者は、其樣子から言へば誠にいかめしく、國家の干城とも謂ふべき機關であるが、どうあらう、其通り能く孫子、吳子のやうな立派な兵略を人に授けるであらうか、實際覺束ない、是れ武將の喰はせものではないか、大きな冠を峩峩と頭に押戴き、長き官服の帶をしめて居る者は、其服製から言へば、何如にも氣高い朝廷の人材であるが、どうであらう、其通り能く伊尹、皐陶などの大事業を立てるであらうか、覺束ない、是れ大臣の喰はせものではないか、

盜起不レ知レ禦、民困而不レ知レ救、吏姦而不レ知レ禁、法斁而不レ知レ理、坐糜二廩粟一而不レ知レ

恥、第二大段の第三小段なり、内實の腐敗を言ふ、

訓義　〔斃〕やぶる、〔理〕筋道をつける、〔糜〕つひやす、〔廩粟〕御倉米、

講述　彼等は皆有名無實であつて、盜賊が諸方に蜂起しても之を禦ぐことを知らず、四民が難澁しても之を救ふことを知らず、役人が惡いことをしても之を禁止することを知らず、法律が亂れて居つても之を整理することを知らず、居ながら扶持米を食ひ潰して恥づることを知らず、

文法　五の不知の字は、卽ち其内容の價直なきことなり、

觀其坐高堂、騎大馬、醉醇醴而飫肥鮮者、孰不巍巍乎可畏、赫赫乎可象也、又何往而不金玉其外、敗絮其中也哉、今子是之不察、而以察吾柑、第二大段の第四小段なす、世の偽りを爲す者の蜜柑と同樣なるを斷ず、

訓義　〔醇醴〕美酒、〔肥鮮〕良肉、〔巍巍乎〕高大の貌、〔赫赫乎〕光大の貌、

講述　家に居る時は立派な座敷に坐り、外へ出づるときは大きな馬に跨り、一本生の酒に醉ひ通して、旨い物を食ひ飽きると云ふやうな人人を觀て見ると、何れも爵位が高くて畏れ敬はなければならず、威勢が輝くやうで人の示しにならないものはない、然るに裏面はどうであるかと云ふと、皆前に述べたやうで、外だけは蜜柑の皮が金玉の色をして、中みは故綿をつめた有樣と同然ではないか、それであるのに旦那は本當に之を見屆けもなさらんで、私の蜜柑計りを喧しく仰しやるのは感服が出來ません、

文法　「金玉其外敗絮其内」の二句は、全篇を收め、且つ篇首に應ず、「今子」の一句は反詰の語にして、冷笑を帶ぶ、

予默然無以應、退而思其言、類東方生滑稽之流、豈

其レ憤リ世ヲ疾ニクム邪ヲ者カ耶、而シテ託シ于柑ニ以テ諷スル耶、』第三大段なり、

訓義　〔默然〕だまる、〔東方生〕漢の武帝の時の人、名を朔と曰ふ、常に戲言を吐いて世の中を愚弄す、〔滑稽〕史記索隱に曰く、滑とは亂を謂ふなり、稽は同なり、言ふは、辯捷の人、非を言ふ、是なるが若ゴトく、是を説く、非なるが如く、能く同異を亂ればなりと、崔浩曰く、滑稽は流酒器なり、轉注、酒を吐き、終日已まず、言ふは、口より出でゝ章を成す、詞窮竭せざること、滑稽の酒を吐くが如しと、

講述　予は蜜柑賣に喋シャベりつけられ、何と言つてよいか分らず、沈默して返事をしなかった、それから其場を立去つて彼奴の言ったことを考へて見た處、東方生のやうな滑稽の流を汲む者に似て居る、どうも是れは世の中の有樣を腹に据ゑかね、邪ヨコシマな事を惡むやうにもあり、さうして明白に言ふのも少し障りがあるので、蜜柑に事寄せ、あてこすつたやうにある、

文法　是れ作文の動機なり、諷の字を以て結ぶ、

餘説

此の論は世の名を盜む者の爲に發したる者にして、賣柑者の口を假り、滿腔の憤氣を漏す、欺の字を以て骨子とし、「甚矣哉爲欺也」は主意を揭げたるなり、「世之爲欺者不寡矣」は主意を發揮したるなり、「又何往而」云云は主意を結びたるなり、

（『漢籍國字解全書』第二十七巻「續文章軌範」）

●本 PDF は、LaTeX2e で組版し、dvipdfmx で PDF 化した。

●訓点付漢文は「漢文の部屋」

http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/kanbunnoheya.html

で